

編 集 後 記

今年度もつつがなく「環境制御」第32号を発刊できました。これも皆様の御協力の賜と感謝しております。編集については、昨年と同様に崎田真一先生の御尽力によるところが大きく、大変感謝しております。本誌は、2010年6月26日に開催した「岡山大学環境管理センター公開シンポジウム」で御講演頂いたNPOおかやまエネルギーの未来を考える会会長の廣本悦子先生による「自然エネルギーの普及に向けて、エネミラはこんな活動をしています」と題した総説をはじめ、実践報告を1編、および環境管理センターの活動に関する文章を掲載しています。

2010年は国際生物多様性年ということで、名古屋で生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)が開催されます。最近の研究によると、日本周辺海域は生物の宝庫と言えるほどに多くの種類の生物が生息しており、数少ない生物多様性に富む地域の1つであることが明らかになりました。温暖化の進展が危ぶまれる中で、この生物多様性の保全に関心が向けられています。温暖化について、前号の編集後記で日本の温暖化ガス25%削減について触れました。それから一年余、新成長戦略を旗頭にグリーンイノベーション、低炭素社会、太陽エネルギーの有効利用等の多くの研究公募が行われています。国家戦略に基づき、重点分野に研究資金を集中投資することはstrategyとしては当然のことですが、その一方で、大学の学術研究における多様性は失われていくのではないかと危惧を感じます。

さて、環境管理センターでは、2009年の10月から12月にかけて、「岡山大学化学物質管理規定」にもとづいて化学物質管理状況に関する監査を実施致しました。はじめての監査ということで、ほぼ全ての部局について、化学物質の管理体制と毒劇物の管理状況を重点的に調査しました。監査結果と改善内容については、既に御存知のことと思います。実際に現場を拝見しての率直な感想を述べさせて頂くと、「担当の方による温度差が大きい=化学物質の管理に関する認識に大きな違いがある」ということを強く感じました。厳しい競争の中で研究・教育を進めるには、「化学物質の管理」や「安全環境の整備」といった成果に結びつかない業務に時間を割けないのではないかと思います。最近のビジネス書に頻出するGTD(Getting Things Done)というワークフローの考え方によると、これらの業務はタスクリストにも挙がらないかもしれません。しかし、実験室や作業場の管理・安全確保はそこに携わる個々の教員・職員の方にしかできることです。タスクリストの1項目を化学物質の管理に当てて頂ければ幸いです。また、その一助となるように、沖センター長を中心に環境管理センターの職員一同努めて参ります。御協力の程、宜しく御願い申し上げます。

最後に「環境制御」では、自然科学・社会科学を含む環境に関する幅広い内容の解説、学術論文、および技術報告を掲載致します。今後も、積極的に御投稿頂けますよう、お願い申し上げます。

環境管理センター 亀島 欣一